小笠原島紀事

巻之廿八

三十

農商務省圖書
第　號
共　冊

太政官文庫
和書門
類　號　函　架　冊

内閣文庫
和
函　架　冊

内閣文庫		
番號	和	8174
冊數	33	(30)
函號	173	180

国立公文書館
National Archives of Japan

小笠原島紀事巻之二十八

目録

○無人島漂流記
○酔翁無人島問答

日本政府図書
浅草文庫

無人島漂流記

元禄九丙子年日向志布志船頭勝右衛門已下五人大鳥島へ漂流翌丑年帰来の抄

去年子十一月二日志布志船主弥三右衛門ゟ船頭勝右衛門五枚帆壱艘へ宗組添児嶋ゟ出帆して山川港へ船掛りし同四日同所を出帆し内の浦の(日向)地大寄の洋壱里程走り出せし処五ッ時夜に東の方より西へ飛物有之心許なく思ひしに俄に西風烈く吹出し夜明ニて四方を見渡せ山田なとも見へしに十一月五日より七日まてならされけるに七日四ッ時分より北風甚しく吹あそ里同十一日風おこ遥そちき同秋十日走りけるに廿一日潭(かき)となり櫨をたて押行に大さ四尺も有るへき蠣亀壱ッ魚を有つめ船の

舵口の下ニ頭を出し船を離れ去やうなりし故船頭勝右
衛門亀ニむかひ何れの方ニ船を向べたるは島出なとて
問ける可申哉をしへ孫去と云を以ひれ去も亀東の方に頭を
向べ三度程首を竭里上ベれ示したるやふなりしかは
又東の方ニ於て地島を何程見しと三たひ亀をおミける
亀又程なく見えれなりるき其夜五ッ時より又た大西吹
出し十一月廿一日より十二月廿四日まて日数三十四日
同風ニて洋中ニ流れ居なり（此乃危難いひ長己西ちれこ略之）同廿七日
の朝大島島へ押漂着しべるさて碇を入きかゝりあれん
そ山川を出帆せしより日数五十四日目なり夜の事ニて
初ハ島とも頼ともえへわからさりし故おひなゝしく物のう
やミぬる事せし故に押依しく思ひ居なり夜明けたに島

を望ミ見れハ島の中程より下之方ハ一面ニ白く雪の如
見積りたるやうなれとも雪ならハ峯ハ押白なる処き
ニ見へハなりしく近寄りて見てけれハ白かりしハ白き島
のひらくとまり集りさうやミぬるハ其島の辺なりとて
島際波高く岸険しくて船の繋き場もなく流れ着てより
翌年丑正月六日まて日数十日余しく本船ニ住居して見
やかうと思ひ煩ふ其中の粮とてハ白米弐斗赤米五升唐
いも並ニ銀子七十目小豆四升黒砂糖七斤なりてハ明し
正月元日ニなりて故々なふハいつもの如く年の首めなる
とて押祝ひぬるにとて僅ニ米十粒ツヽをいなゝ此唐い
もを切りへき二タ切ツヽを歯堅めと名付て祝りあるやつ
て粮乏しくきハ鈎をおろしちへ魚を釣ぬるに多くハふつな

りけなはきと作り泣きる日のみ有りける故正月六日や
うくましく船を岩間に引向けしに浪荒して本船破損し
ぬ水主三人碇（礒）に飛移り残る者人は船頭と共に乗りゐ
て船中の器物大かた陸に運ひ向け橋船をも引上たり據
の海際より巌石高く聳へ或は高さ三四丈の處而已にて
登るへきやふもなく本船の板をそへつし材に作り崖の傍き
處找見て漸く上によち向かうりぬきもたへしの平地何ら
と間の板類を打組みつゝ木屋の如き小屋一つちへてまつ
住居をそなし然山に来くみ方言多し是を毎ること頭に
嚢やうのものをかけちきりとり食事せんはきと山の岩
角をるとく跣（はだし）まて足皮を破りしまゝ怪我なとを解き草履
を作り岩石をよち登りぬ故島中に胡頽（くミ）の木溲疏（うつき）の木の

ミまて大木曾てなく草はそ茅萱（ちかや）磯（いそ）紫（むらさき）山芹の類なりけた
船のまきをたき刺さみたれたかなし呑み故
一島の高さ捨八九町もあり廻りは弐里余も有るへしむ
かし人の住居までも以た跡しと見へし處三所何里石
垣なと築き又は岩穴に栖み或は油火を燈もし為るや
うの処も何里又た切板（まな板）なりの何里て其邊にて大島
一の骨なと旨数の出里たりさきは馬をおろし様へたる
りとおをもなる
一島は右の大島又た鳥鶯鸛鵐なとにてはをられ山中ぬ
作太鳥みちくて足の蹈み處もなくみも人をおそきれ
却て人き追ひ足は人ひつき裳をくゝへ引なとして人
も宮もいつ地を出して逃亟き處もなく島の上とハ島

いやまりて侍りぬる嘴の長き六七寸嘴さたかしくこ
み口甚た廣く足に蹼侍り鳴声ハガヽといひぬ鳥も鳩
ほとにして鳴声も細く鴬もなちいさし右大鳥は死ぬ
る處三ケ所に窮り侍りて其外にても死し多る跡さなし
し
一未ぐミも正月七日より二月二日迄も宿りくとちひし
つともゝや採食しぬる程に一日に一箇か二箇いゝ宿つ
とり給ひ其中古を大鳥子共産そたて子飼の餌なくて
せん為めに諸の魚をくてへ来るの誤見て地におとし
一多くを皆こ捨ひなり食せい多しけるおほかたハ烏賊魚
碟魚鱵魚なとの類にて鳥も羽こ子数多も育てハ一羽
に子も羽づゝ生立ぬ卵の大さ廻り一尺斗里餌飼の時

一右釈鳥の嗉より出し嘴にくて一子鳥の嘴にうつしく
てそる時すも子を嘴にうけ得れして地に落さしも釈
も子もくてはヌたるにより胸大きく見えたるをハ柈
にて多ゝ死すに餌を出し其ほとひひらけぬきた其嘴魚
或ハ鯨の肉の切さを二ツも三ツも吐き出しぬるを見
とも捨ひなり食ないぬヌた雄鳥と見えたる脊筋黒く
一八人を追ひ喰付なと以多しぬ右ハ餌飼におとさし
は右の如き鳥鱵の四五尺許も何なへき又ゝ飛魚も試
大二三寸より小なきを除をのなり
一右水かしもなく凡ゝ天水をうけ飲料とそ貯し雨ぬな
き多時ハ蜊を剪し水とおしみを蓋乃根をそはふり湯
点のき於

一子鳥既ニ生ひ立ち迄も親鳥の養し餌をよくうけ拾ひ
給ひ不とは養餌もなく粒里ぬ程にそもや秋多き殺
し食ふへき空ひかさらひぬ迄とも各申あ茶も苗
の節の命もおふ何をと以ひ甲斐なき事なるに悔して
今まて島の蔭にて命我助かりたるふたとひ飢多きを
とて今をおる我殺をいしやとて彫岩なとを古ちもなし
し山鱸魚を拾ひてみしに飢を凌きぬとも大かた腹
痛こせき下しみへても鯨の白油とも可申株の物出きも
多の蔭したるを茶里煎しぬれは溶けみを大小何ぬり
下油の出とくなるを給ひへも腹痛を止み申候手足な
とに麻付る時もなる油を清まも以え申候
一二月十五日より破損をし本船の板を茶網舟のとも
に長さ七尺余りとの作り続きを以たし幅長さ五尺も
の里の舟に作り立て候
一衣類も波風雨水に何ふて悉く破れ多く茶を兎角凌かね
居つゝ漸をたなゝまえよ里香餌もなけれは音て弱り
行を何時も何里ゝ茶時は毎夕毎にきに大亀何らても
アギナゝと以ふ魚を磯回こさき上け追ひ寄せなかと
に岩の上より鈎(かぎ)を以て引きあけ食に何ても来情又た
拾ひ製いたる魚を火に何ふりみを日乾し節のやうに
出しちへおとしつゝ大概六七日の食料を用意し北風
日和を待つ處は翌二月廿五日とい以ふ小洋中帰りそ
日和を返し極に出ち八畝作り立舟に出家里て彼ら人
と大社に誓願を出ちし日本の方我ぬし相み親子妻

子共ニ再ひ何をせ為ふとも又た海底の水屑なをしめ玉ふとも天道ニ任せ奉るといふニ五人共ニ今を限りの事なれハ詞もむせひて磯辺ニ平伏を次ニ此の島の地神を礼拝し又た今日まて我等を救ひ玉ひたる恩人み何里とて大島おもねし遂ニ閏二月廿五日の朝四ツ時をもて彼島を出船し向方を見定て押し出を九そ在島の月数七十九日なりしかるニかの大島とも影しく磯辺ニ飛下り海ニ浮ひ出て我くゝ出船を送り又さ名残をおしミぬるさ悔ニて鳴咽き舟さ処へ飛たつも何里五六日の間もおひ为ゝしく船を送里来しる其後も四五許舟をもなきハ送里来る其情やさしくそ覚ゆる扨船そ風ニ任せ浪にゆられなとニ三月五日の朝四

ツ半時分ニ遠江国なる川尻といふ地ニ漂着したり此處まて舟をもれきハ送り来りし大島も程て飛去る跡を三たひまて伏せをかみぬ

一 かの島を出船としより三日目に島壱ツを見出たり彼り大なちハ草木をなく岩山ニて波みた其後六日めと申ニ又ゝ島一ツ見出たりしきを耕作まてもいたせしと思もなゐなりさゝ小なり詫る人と働きしかとも波風何ちくして寄せ難く壹粒十一日の間も沖中ニ漂ひ流さまなるきて其間ニも大浪いくたひも船ニ打込み今を限と思ひ事数度ちハ既ニ三日めなハ火も打消へ六日めより食物も尽きもて飢れハ船頭勝右衛門小中爲の中ニ米一ト俵あみ斗里嗜ミ置

たるを今を限りの名残とおしミ以たゝ北各所へ致其後
も水食とも一向給不申候
一三月五日川尻ゟ流出致前段勝右衛門申も如しきに染
さは里致香花以たしぬを以て家々このよ致みやふら
人殺をもて気もうとく年て物に迷ふ所各たいなゝま
やいひ申家不薬なとの香に思ひもよられと申まじき
里に薬の香以致し候後後ま箱え不帰里洲相詫さるし
あをも箱えにて三月四日まゝ搭右衛門の妻子とも父
一夫の忌日ましてき向を以致しせし事何りしやうやの
ゝ家たくひの事以くらも何をとさゝまた罷しぬ
一我ゝ遠江国へ着した旅事は代官へ差遣し候役人方一
とた里乳の上飛脚を以て江戸へ申送ら旅宿洲名の事に暑くか

ハ里しけ石江戸御屋敷より祭馬竹諏訪甚右衛門横目
玉方撫右衛門御掛方福島甚五兵衛両人遠江国に
条らさ家ゝ五人を請取り夫より東海道往来筋へ出致
度折節　左守様御下国の時にて赤本亭御用人土山検
右衛門を以て微細ま申上らを三月廿三日伏見まて
御供致召連四月十八日鹿児島へ帰着之同く廿三日在
所志布志へ帰着し候り　遠江国まて御内より之下拘之役坂共累して委き載せに右
一漂流帰人みの者共船頭志布志の勝右衛門三十八年水
主志布志の浅右衛門五十七年同志布志の林次右衛門
四十年同志布志の七十郎二十四年同波見濱の五郎右
衛門二十年以上五人なり
一志布志町家船主山下孫三右衛門も右五人のこの

一ともに行衛知れさるに極り甚不便の至ニ五人之家内共
成介抱致し並追善の為めとて下人下女なとに身代
銀なと取らせ其外旅客行脚等の者ともに衣食の類を
施したひて五人の冥福をいのり常々又たさきより此き
猟師海亀を捕へ殺をんとせしをそれ魚々價成與へて
その亀を海に放しなとせし事二三度なりに此き五
人之者とも亀の恩義を報て悪なく頃至しける者そ多く
誓祝の趣きを遂させ其貴を孫三左衛門より出し下人
彼是の五郎左衛門ゟ永代銀ニ切論刀衣類なとあた
へ宿かへ暇を人毎ニ心成つけ扶助しあ成なり
元禄十年丁丑五月十八日

寛政九年無人島より帰着候三艘之者共之記

一土州鏡郡赤岡浦松屋儀七船四人乗りにて天
明五巳年無人島へ漂流仕二ヶ年の内三人病
死いたし壱人ハ残り十三ヶ年島ニ孫左衛門
一同帰国仕候

一摂州大坂北堀江亀次郎船十壱人乗りにて天
明七未年越後新潟より御城米を積て江戸へ
相廻し再ヒ江戸より仙臺にて御城米積越ゝ乗
り人と共に遠州大坊の鼻より漂流致し翌申年
無人島へ漂着仕候亥酉年之内家組弐人病死
いたし九人ハ残り十ヶ年在留致し此度帰国
仕候

一薩州領日向志布志浦中山屋三右衛門船六人

斗りにて寛政元酉年漂流仕翌戌年無人島へ
漂着仕丑年迄ニ両人病死仕四人右弥三八ケ
年在島候在中此度彼出仕候

私共漂流且ツ無人島より帰着之次第

私共漂着仕候無人島ハ凡そ高さ十七八町島の廻り弐里
程も可有之哉と此考申候山形り真中高く東西せし低
し六七合目ニ中檀有之夫より山三ツニ分き小より南
へ打通し岩弐ケ所有之凡ソ長サ四五町程も有之哉と
右見へ申候其辺ニも大島形多敷岩申候北之方ニ穴何
り差渡し四五十間程深さ弐十間餘りも有之候其谷元
て葭原にて中に蔓ニ茶候木有之候是ハ西方ニて豆始
じと申木ニ似たる様ニ候南ニ而行つめ候て同様の

一穴何里木茂同様ニ生ひ茂りせし中狭く見へ候右穴よ
り難登き東之方へ下り候へも右ゝ木立有之容成座候
一此木出地にて一ツさき分申木ニ能く似申候此木の皮
さもき硬細細物等其外ニも此家仕立右用ひ申夫木の
言さ凡そ六尺位ひ限りに成座候島の廻り想像岩山峻
阻ニて東之方四五町程石濱有之夫より北之方ニ三町
余石濱にて入江の様なる處有之候其處上之処留にて
此谷升立申候所々に葉萸(がミ)の木有之字も葭大黄も字朝
一泉ニ住座候大黄々芋候てたもとに右用ひ申候右之山
上も岩崩きニて登り難きニ付私共上り候儀無之候
一私共住居仕候處も初東向之岩穴三ツ有之波ニ付夫を
捨へ出し又た打穴三ツ補理(ホリ)五六尺四方の穴に弐人三

人四人位まて住居仕候右住居之所より五六町余東之
方にて小船折立申候此島土地よりも至て暖気ニ御座
候
一食物ハ島魚貝類蔓(ツル)菜(ナ)等を潮ニて煮又ハ焼候て夫食ニ
いたし候得とも是も沢山ニハ無之候採り方を以て割
合を月々夫食と相賄ひ候水ハ出水無之天水を溜め候
ニ岩穴の前に池抔堀り貝売にて壱つ人ひを作り塗り
堅め溜置申候得共旱之節ハ度々水切れに相成難儀仕
候
一衣類ハ暖気ニ島故単物襦袢等にて相凌き冬に至りても
島羽にて蓑のことくいたし是へ着用仕相凌き候
一島に有之候魚鳥貝類等多からす候大旨いきも無之白

く羽根に黒き所少し有之大さ両羽を開き候得ハ凡そ
七八尺も有之候此島人を恐れ不申候故に岩間ニ追詰
め棒にて打殺し夫食ニ仕候此鳥五月頃より八月頃まて
て何方へ参り候哉一向居不申候近頃ハ人を恐れ容易
に捕れ不申甚骨折申候右地にて見聞不申候青ヶ島に
て承り候ハ白鴎と申鳥のよし兼て承申候右鳥より油
をとり穴の内て燈して相用申候当月白八年中有之候
一鴨乙女も年々より相残り候義有之候乙女八年ニ四
五日の間のミ残り来り候鳥足ハ初少し有之候所外よ
り相残り候哉又ハ島ニて生立候哉近頃ハ影多来り
住居之穴々来り食物等を取り一向人を怖れ不申防き
方ニ難儀仕候程ニ御座候

一さゝ魚鮫赤魚等有之候さゝ魚も当地にて見掛ケ不申色黒く秋鯛に似て壱尺弐三寸より七八寸まで有之鮫ハ当地同様に候大小有之候赤魚ハ当地のかさごに似申候右魚釣候ニハ木の皮細縄の切れ等にて釣糸こしらへ浮の日柄見合せ釣上ケ申候食ニ仕候得共漁隙なる言く荒浪也へ釣き糸断く一日に弐三枚能く釣候日も六七枚位ひ釣上ケ申候甚た深山ニ有之候得共捕らへ存し不申乍去も其之候故釣を縄ニつけ其の甲子惣て右島中断く弐三枚ヰ遊潮にて喰合事ニ仕ケ貝類ハひろ三貝なゝみ貝と申て至て細かの貝有之深を見合せ拾ひ当潮に焚き夫食ニ仕候此外魚鳥類一切見当り不申候

一私共右島中右島ヘ漂着船無ニ漂流之船等一切見當り不申候先年遠州舟一艘右島へ漂着のよし江戸塩町宮本善八船并艘元文三年正月漂着之趣右艘ハ書置き岩穴之内之板ニ書記し有之候ニ付船印ハ読せ候得数年ニつき板腐り字性相分り不申死ニ相見へ候且又薩摩船之印栄吉沢門ニよませ候処右同様ニも可有之哉と申候右島に先年人居候様子ハ岩穴の内ニ鍋釜の類ハ相見へ候の人さり有之候かたち柱ニ相分り不申候外ニ岩穴中ニ人を葬り候体ニ而骨を人

一右者之候又た外岩穴ニ病気にて臥候侭相果候体の死骨一人分有之候右之外所ニたふれ候ほとも死骨一切見当り不申候

一私共乗組之内七人追々病死仕候ニ付其節右島の地所
見立仲間とも寄合葬埋墓石に俗名彫り付建置候
一右島野獣有之候事にても致し候節ハ一面に取つき容易
く食すること出来難候
一右之島野獣有之候得ハ山坂とも可申哉其地の坂より立
大きなる穴にて昼夜とも穴の内なきと忍ひらくも右
候事ハ出来不申候外ニ居候ても火を起し候ハ住
居出来り不申至て難儀仕候
一此節私共乗組候小船打立之義先ニ申上候処
僅三艘乗之者共数年相立候内追々病死之者有之拾四
人ニ減り昼夜穀生而已ニて露命を助り相立候所日々
ニ艱難言語を絶し候事故打寄り相歎き候内存付候て

如此難渋之命助り罷在候るも以つの世ニ至地故郷の
様子承る便りも無之此通にて立往之命数尽き此島
にて朽果候より外無之心外之至りニ候平日神仏へ祈
誓仕候も何卒日本へ今一度立帰り妻子共へ對面の
ニ相願候然る薩摩船にて積來提鍬弐挺鑿三挺斧弐
囲り金壱ツ山刀包丁壱枚やすり打弐ツ脇差壱腰右上
け置候間是より寄り木寄り鉄物を拾ひ集め以前の船ニ
も小船を打立出来候て運を天に任せ此島を出生し運
ニ叶ひ仏神の御加護を以て地方へ着付妻子兄弟対面
以たし候ハヽ誠ニ大願成就難有き御事なり若又運尽
如何様ニ成行候共迚も朽果て申命ナも思ひ残し候事
無之やと各申合セ候所何連も同心一決仕り依之種々

申合セ候得共第一鍛冶無之候而者釘出来不申候得者
十四人之内鍛冶心得候者壱人も無之家休七ト申者在
地ニて隣家ニ鍛冶有之朝夕見習候得ハ可也ニも鞴
と仕立見可申とて夫より寄木にて拵いさに取急り仕
立候処可也ニ出来候間石を鉄床ニ以為し斧を鎚ニ以
たし不足の道具を造り出せり釘抜壱挺釘〆壱本釘鑿
壱挺鋸壱挺庖丁壱挺乃ニ鉋壱本墨壺壱ツ仕立夫よ
り寄木を心急候容易なり板ニも可相成木を拵寄候と舟
天ミ共へと取上け船打立ニ相急り候所船ニ打立方哉
存し候者壱人も無之ニ付申合茲にて船形を造り夫を
手本ニ以為し長サ三尺程の木ニて船を打立釘の打立
方哉試ミそれより地形を見立小船打立ニ取急り候得

共寄木をはてる仕立候故別て暇取り不申三ヶ年余相
急り漸く成就仕ル処右船打立候場所より濱辺まての
間難所にて容易に船動しかたく候夫より道普請に取
急り土石の変切通し岩石等へ道を付ケ数日相掛り漸
道普請出来仕候ニ付人力多く相掛り候得者道も早く片
付可申候得共夫食を相働き候ニ不いたし候得者存
外日数相掛り申候扨手本ニ致候船ニ書置き相添へ岩
穴の内に大切ニ入置候後漂着者有之候ハヽ力にも可
相成哉ト五島中の様子夫食等ニ小船打立出帆の趣委
しく書ニ記し申候夫より日和見合セ出帆可仕与船中
飯料ニ五島の干物魚の干物等用意致し水樽四ツ仕立
天水を入き用意相調ひ候所三艘寄り合共ニ磁石せ之

方角不相分夫ニ付致方なく日の出候を以て相考西北
と心当ニ南風を相待候所南日和ニ相成候間一統神仏
を祈り出帆仕り追風ニて昼八里程も走り候と覚へ右
之島蔭見へ隠き候其外島山等一切無之夫より方角不
相分風ニ任せて五日走り候五日目夕方ニ相成り島山
見掛け一統力を得右島を心当ニ走り候所翌六日目昼
四ッ時頃着船仕候島之役人衆出会何れも種々御世話
を以て小船をも漕場以為し私共も無難に上陸仕り相
尋候所春ヶ島の由承り誠ニ歓ひ難有ニ皆々落涙仕り
年月承り候所寛政九巳年六月十三日の由被申聞候尤
候得者私共無人島を出帆せしハ六月八日ニ御座候夫
より春ヶ島ニ御介抱を以て逗留仕罷在候所七月八日

日和直参候ニ付出帆相願候所水夫両人御添被下都合拾
六人乗り組七月八日朝五ッ時春ヶ島出帆以為し候ニ
汐風等直参同日八ッ時八丈島八重根浦へ着船仕ト御
役人中より御尋ニ付成行有体之通り申上候得者御役
人中浜辺へ御出御吟味を以て小船を陸上者ニ被成下
御礼之上私共難儀等御改之上早速旅宿被 仰付萬事
無差支御介抱被成下尚又被 仰付候ハ便船次第江戸
表へ御差出し可被下旨 仰渡ヶ重々難有奉存候

八丈島送り状

當七月八日昼八ッ半時ニ八丈島大賀郷沖手ニ而小船壱艘相見へ候ニ付早速人足召連差越候處右小船大賀郷八重根津呂へ致入船候ニ付相尋候所土州鏡郡赤岡浦松屋佐七船播州大坂北堀江亀次郎船薩州志布志浦中山屋三右衛門船右三艘乗り之者共無人島へ致漂着彼島ニて船を補理し拾四人乗り組致出帆候所春ヶ島へ着いたし右島より水夫之者両人乗組都合拾六人乗組八丈島へ着船ニおよし申候間上陸為致召連休宿申付致介抱漂流之始末相尋口書之趣写し

薩州志布志浦中山屋三右エ門船

仲船頭 栄右衛門
外ニ水主三人

私共儀八ヶ年巳前無人島ヘ漂着数年在島仕り補理船
ニ而八丈島ヘ着船仕候始末逸ゝ可申上旨御尋ニ付左
ニ申上候

一私共儀松平豊後守領分薩摩志布志浦中山屋三右衛門
船頭栄右衛門水主共五人乗ニ而寛政元酉年十月二十
五日志布志浦出帆仕坐備中国玉島ヘ同十一月二日着
船仕り運賃積ニ而操綿積入薩摩ヘ帰帆可仕所水主之
内両人病気之者有之船中手廻り不申候ニ付同所ニ而
重次郎与申者相雇都合六人乗り組同十一月十五日玉
島出帆いたし同十一月二十六日同国田島ニて越
同月二十八日東風ニて日和宜敷候ニ付出帆仕候所同夜
月向離之内ニて俄ニ変来候得共夕行き悪敷指留候も
沖ヘ引出さき翌二十九日大西風雨時化ニ相成り地方
見失ひ向方も不相分無為方津あせ走りニ仕罷在翌
三十日ニ相成弥浪風荒く船難指候ニ付檣を伐り捨り
さ沸ひ心頼仕りたらし細を引すせとも走り兼候何
方ともなく漂流仕罷在候丈より波風高ほまり漂々
候も成丈得せ飯米後ヘ切き水一切無之坐汲斗りニ
る十日余り難儀仕候得共一向島山等見掛不申翌戌年
正月二十九日与相覚ヘ島山見懸候ニ付力成丈船ヘ碇

を立候得共海深くして相立不申候故弁船ゟ捨て艀に
て右島へ取附き磯辺ニ寄せ艀を繋き候へとも荒磯故
難相候所陸より人来り私共引揚け候而艀の小道具等
共ニ取上け漸く陸へ向かり右之人ニ相尋候所大坂
北堀江亀吹郎船ニ而漂着の者之よし承り候まより右
島の枕子承り一同ニ相成り奥島斗を食物ニ以たし露
命相助り申立ル然る処ニ水主惣右衛門事船中之難儀
ニ気弁仕り其上持病之瘧気さし発り相煩ひ候得共奥
島ニ外食事等無之候得養生不相叶同年六月二十四日
と覚へ候日病死仕ル同善助儀も是又惣右衛門同様相
煩ひ丑年七月二十九日と覚候日病死仕ル右両人之者
共死去之節俗名石ニ彫付銘々葬り候所へ建立申候

一三艘乗り之者共一所ニ罷在候所へ皆々相談仕候ハ迚
も夫食并ニ水乏き之場所ニ住居候ては助命以たす
のミニて存命之程甲斐も無く候乃此侭にて相果候
よりハ萬一国地へ帰事有も可致哉各一命を神力ニ任
せ幸ひ鋸壱枚鑿三挺斧弐挺田りつ庖壱ツ鉈弐枚山刀
庖丁壱枚やそ里わき出ツ古脇差壱腰鉈壱枚ハ用立不
申候得共此道具を以て寄木まても有之候得を小船壱
艘造り立日和を見合せ此島を出帆可致と皆々相談之
為仕ル為始以古を相仕立釘抜壱挺釘〆壱本釘鑿壱挺
鉄鎚壱挺庖丁壱枚樵鋸壱本墨壺壱ツ出来い分し候為
凡そ三年程も懸り小船出立日和見合セ北東使内南風
今覚候節出帆仕何出とも無く汐風ニ任せ走り申候所

五日目ニ島山見掛候處船中一同力を得右之島山を心
懸ケ差寄り申候所翌日昼四ッ時着船仕ル右島より
御案内被下上陸仕承り候所春ヶ島の由兼り申候年月
を兼り候故を寛政九巳年六月十三日之由右春ヶ島ニ
て御介抱を請申候七月八日迄罷在候所日和ニ相成ル
乃出帆仕度旨春ヶ島御役人中へ相願候所右様いハ當
島より水夫の者を乗船させ可申被仰付候則ち春ヶ
島より水夫として乗組ミたさき郷合拾六人乗組七月
八日朝五ッ時春ヶ島を出帆同日昼八ッ半時八丈嶋へ
着船仕候所早速御役人衆中濱辺へ御出種々御手配り
被成下補理船陸上ヶ被成下私共諸道具衣類等御改め
一相届漂流之島之様子 御尋之上旅宿被仰付諸事世差

一支内介抱被成下此上便船次第江戸表へ御差出し可被
下旨被仰付重々難有仕合ニ奉存候
右之通り私とも漂流并ニ右島中在命ゝ始末少しも
違無御座候依之口書連印差上申候以上

薩州志布志浦
中山五三右衛門船

寛政九巳年七月

生国薩摩国
炊 八五郎
宗旨禅宗
当巳三十九歳

生国日向国
重次郎
宗旨禅宗
当巳五十三歳

一生国日向國
船仁
甚右衛門 当巳五十八歳
宗旨禅宗
生国薩摩國
船頭
栄右衛門 当巳五十三歳
宗旨禅宗
八丈島
御役人衆中
右之通り口書取置申候

一無人島より乗り来り候小船幷ニ諸道具荷物改之
小船壱艘
艪五挺
是ハ無人島ニて寄り木を拾ひ拵立候
内四挺ハ大坂船より取揚ヶ置申候壱挺ハ薩州
船より取上ヶ置申候
細弐房
檣壱本
是ハ同島にて木の皮にて拵立て申候これハ同島
ニて寄り木を以て継立て申候
弥帆柱壱本
綱ね弐房

是ハ右島ニて寄り木を以て拵へ候
是ハ右島ニて木皮ニて拵立申候
水樽 四ツ
是を右島ニて寄り木ニて拵候
〆
七品 船道具之分
鐁 弐挺
鋸 壱枚
鑿 三枚
斧 弐挺
山刀庖丁 壱枚
一 曲りか祢 壱本

やたり折き 弐ツ
一 脇差 壱腰
但し拵なし長壱尺位
右八品ハ国地より持来之分取上ヶ置候品
鉄鎚 壱挺
釘鑿 壱本
釘〆 壱本
釘抜 壱挺
庖丁 壱挺
とみ錐 壱本
墨壺 壱ツ
右七品ハ無人島ニて拵立て候品

以上小船并ニ諸道具之分ハ江戸表へ伺之上可取計旨
申渡候

帆　四反

島之干物三俵

是ハ三艘乗り之者衣類無人島ニて継立候品ニ付
改め之上当島ニ而銘々ニ御渡し衣類ニ為致候

是ハ三艘乗り船中之飯料無人島より持参り候
ニ付当島ニて改め之上乗組之者へ御渡し申候

木綿襦袢ニ単物壱ツ　船頭　栄右衛門分

同　襦袢壱ツ　親仁　甚右衛門分

右同　水主　重次郎分

右同　炊　八五郎分

右衣類改め之上船頭水主へ御渡候

一 右之者共当巳七月八日八丈島ニ着候ニ付同日より米
春麦荒麦当島逗留中無人島ニ付飯料として書面之通御
渡し介抱以為し候

右之船頭水主共地方へ御渡り候船無之ニ付此度当
島便船を以て御送り根岸肥前守御役所へ差出し
候間着之上御差図可有之候此段為御心得申達候

以上

八丈島

名主

小左衛門印

同

同　助之丞　印

善太夫
出國ニ付無印

同　三郎右衛門　印

同　秀右衛門　印

町組預り立會役兼
服部源五郎　印

神主地役兼帯
奥山右京　印

地役人　菊地五平治　印

同　菊地左内　印

同　菊地恒七　印

松平豊後守様
御役人衆中

我附庸大島の数百里東に一島何里大佛の出没によ里
て見きれははるかに白雲の波間に漂りて稜々さる何里
なとも其の志るしなるらんとむかしより島夫のいふ
なるさきと其島をいふに名つくるやまた其の島嶼に
人の何里やなしや詳ならさまさ寛政の初なりけむ廣
府の士田中伊三郎なるものある罪有りて大島に謫せ
られし此人元より膽勇の武士なりけるか島のむか
しかたりを耳てもて其島を知里とりて君に奉里その
功をもておのきみ罪を虎之なら人とて此島乃酋長擬
浩間切の藤純といへるをかこらひ健卒を率ひ食糧兵
器を乃世て洪濤をたれきてをし渡る弐百里許りにし
て果して一島を得たりと此人とする小岸高く聳え浪

何ちくして船をよせるに便なし皆さめく望みるに人
栖む地とも思はれ兎角する程北風烈しく吹出し島
根を取も使し漂ひ流るゝ程に日数経て琉球の小島に
漂ひ着たり彼洪海に帰きてや此様もかゝる企も那の
望しとなる人桜まるに伊豆嶋へ至りし皆も此舟子の舟
子ちの漂ひ着たし島は一ツ地ありけんなし北の拳の
事も嫌忌をへき物しなきとも元より人に示すへきち
称も何せの記しを置く事になん愚志なす

酔山翁問
松兵エ答

無人島談話

天明七丁未年十一月江戸川出帆翌申年正二月
の於て人島に漂着寛政九丁巳年六月八日無人
島乗り出し同月十三日青ヶ島へ着船同七月八
日青ヶ嶋より八丈島へ渡海此年十月のさ頃江
戸へ帰帆

島物語

島は無人島なり物語も松之断ゐす居九里東によう俾しと
ゝむるな酔山翁なり寛政十午年弥生の末たゐり草庵の
扉戸叩くものゝ何里入り来るをみれはむくつけ地以なゐ
男なり以つての人物と問ひけれも口きゝ玄系とて流
前の船頭なるか漂流して無人島に五年はと数年去年の

め恙なく江戸へ帰里居きたるなり其の消息を持来れり
見るへしといふこれ然つらしく然てたき人也けらそこ班
たへ入るへと座上に引て我か船頭なり礼義を知らぬ然
しるへと何くらをもいて望したりけてこそ家好む家乃
事なりとなくくと居るへ彼島の事を問ひもせへしむせる
へといはいいつくつ続きたる疑付なりけて此松に情
も出しをみ船は大坂舟なり江戸にて在る時古代友山中殿
差図にて仙台荒浜に御用米積様に来るへしと何利丸きと
ふ十一人にて天明七未年十一月二十七日江戸川を出帆
してれ為三崎にて風待して十二月八日順風なきも九十
三里の灘を走らせる所に大ほうの鼻にて俄に風変り大
暴風雨にな里大洋中に漂流して方角も分らされは檣を

伐て各髻を拂ひ神佛を祈里て風にまかせて経る迄に
に居る故日と月日もさため不分らされとも大抵五十日
余りなり
此漂流五十日斗りの間危き極月大悪のはなるに堪か
ねたやうなる暑気に向ひし事有けれは熱帯の地に近
りしにやまより濡絆風に向ひ無人島に至りしは六十
日もありの内と語り中抜
もや飯米も乏しくなりたれ粥をすゝりてしのきたり又た
船ともいたく損し水溜りへ船底に何かの入る事頻りな
れは各力を出して水を汲むかくする内に島山を見掛け
れは皆く悦ひ船さきの島に近よりて見れは岸高く
して漕ゆらし船を寄へき便りもなく亦た岸に寄るへ

きやうもなし碇をおろしたれとも海深くして碇きかに
小船をおろして釜鍋火の道具を入て各残らず是に乗至
みしく岸近く浪静なる所をたつね漕て陸に登りけるか
へる難なきは只陸を指一にして船中の物を揚るに
以と悔何くなりかへり見るに本船ハ南な流れて忽ち
土姿を見失ふ兎角する内に小舟を行方我知らずなりぬ
きて上陸して辛き命を助りしかとも食物もなく飲水
もなし探道の具我拾ひ売を砕き身を働に焼きたまきを
食とし岩に鳴く内に食物やあるらん人尋て見るへしと
て山上に登らんとするに薄萱の数五六尺に生ひ茂けり
て道もなしやうやうにして山の上に登りて向ふの探道を
見おろしたれハ人の形ちしたるかゝくり立居たり片て

扨人は住むなき波とのにあつね問ひ人と思ひ山を下ら
んとするに前の如く乃もなし草をわけつゝかちふして
山を下り彼碑辺に至りみれは髪黒く目の色赤く徒の
古き木綿を着の衣まて結ひ付たるを着たりいふなる人
ぞと尋ね寄るに彼も驚き多るさまにて答ていふやう我
れは土佐国鏡郡赤岡浦乃儀七か船に雇き四人乗りにて天
明五巳年二月難風に何ひ漂流しておのしはにいたり今
年まて三年を送る間に残り三人（源右エ門 六甚兵衛）長のとの名病
死して我壱人活き残りし名を長平といふをのなるよし
をうた物我等も名名を告け此度漂着の始末を語りけき
れ互に涙にむせひてしはし物をもいはてありしかさ
て是るやうきの島に住む人もなるや且ハ我国の船或ハ

外国の船なとの舟懸りすゑし悔なきやと問へも長平答
へて云我国ハ云ふに及ハす外国の船とても通ひて来る
事なし其の上此島も無人島にて人の住居なきのみなら
す食物もなく水もなし只魚鳥を捕へてくらひ天水を待
ての也より外ハ命を保つ道きてたゝなし此の島に漂着
してハ再ひ本国ハ帰る道き便りもなし此儘つゐに死ふ
果るをまつ斗りなりと以ふを聞て我等やうやうにして此
所に上陸して辛き命をたもちたる此世の中の悦ひにて爰に
何ゝれいろいろにもして本国ニ帰る時節も何ゝハやと思ひ
居しハ今長平か話を聞て各腰もぬけ力も落て涙数刻に
及ひ事り此長平壱人にありて火を絶した者ニ火食せる
事何たときも鳥の肉を生にて食しまれも年月のを経て眼

中朱を差ゝくうわく赤く染りたるに松之博なと同船の
後も煮焼し多く肉を食しけるか自然と赤ミ去りて平人
のことき眼中になりたり或時松之博鳥の肉を生にて食
しみるにいかにしても喰えず、ゝをのに何ゝに長平ハ必
死とおもひ極て食しまれもにやさき美味として命を
持なきけ哉な遠窮それも窮するまゝに命もつなうず、
とのにや哀きなることゝもなき事恃其後ハ長平も一所
に集りて十弐人にて弐間四方もありなる岩窟を穿て住
きを住居と號を後に三四ヶ所にかゝ岩窟を作りて人
数をまして棲かとまり食物を魚鳥と貝類のミなりかくて寛
政元酉年十二月二十六日日向細島より出帆をし漂船無
人島に着し翌戌年薩摩志布志浦の船六人乗なるか漂着

しれるに各廣道ニなり立て引揚け艀に入たる小道具など
少しも上ヶ置に其内ニ本船艀もともに破舟して浪にと
らきて行方を志らず乃六人のその者岩穴に住ひて嶋の様
子をも語りあせともにその穴に住居しなり松之衛ニ同
船の中両人水主若助 永以忠八は食物の乏しき故にや病気にて死
したる薩摩六人の中式人 惣右エ門 五之丞 共ども同病にて死し
たる今は三艘の乗合十四人活き形かくへなり
市之丞長之丞清蔵吉蔵内蔵三之助松之丞薩摩船にて
四人八五郎重次郎甚右衛門栄左衛門等なり
此島の廻り凡式里もあり山あり高さ十七八丁東西少し
狭し中腹より峯三ッに分れ南の方へ通りて谷式ッあり長
さ四五丁ほどの谷の内に穴あり深さ式間もあり幅四五間

南の方に同し穴壱ッあり狭しいつきと屈きて内ニ入る
事あたハ尽殊に荒萱生茂りて石もなし四方海岸岩高く
浪あらし大風の時ハ大浪三四町程も山の峯に打揚る也
きに依て岩穴の棲も五町許り山の上を採ひなり
此者とも穴居の中萱を背き下に萱の植を重ね祭て四
方とも天井ともし又た襖ふさ代へなるよし
此地南海中ニ在て暖地なる故ニ常に硫黄の気有之焼け
山なり岩石もことごとくやけ石形ちを山に登お人とある
に岩崩きて崇りかなし夫る悪に穴居も久保き易くして
久しくなお持ち難し
此者共洋中ニ在て時ニ船破れ水入り漂ひ一昼夜只足
を汲むのみに積みを用ひなきとも五十日斗りの内を

人も煩ふものなかりしか上陸して危難を逃れ心気安
くなり且ッ此地飲食なく其上古郷へ帰るへき便りな
きを歎き心気ゆるみて皆煩ひ死し者多かりその外の
もの共に生る食を求むる為めに終日鍋をたき夜ハ草
を以て草鞋を作り其外船を作り道を作るためにみし
も年のたゆまさるそのを生て帰りしとなりさまを見
きも人の養生ニ只此事と見へたり
此の地喬木ハさらになし高さ壱丈許りを限りとされて
草木の種数少し焼岩なる故ニ山水なし岩を穿ち天水
を溜めたれとも焼石ゆへ早く涸易し此島の外ニ別ニ島
山を見る事更になし山上ニ上り遠く望みみれとも諸山
と覚しきものの見へす只四方漫々たる蒼海なり在国乃内

異国船乃往来せるを見たる事なし其上暑熱ことに甚し
く岩焼て徒足にて歩行し難し冬に至りても霜雪降らす
草木枯れす雷ハ鳴れとも地震ハなし雨も四時共に降れ
とも冬其の外ハ旱多し潮も塩気甚しく八丈の潮もこの
島よりハ塩気薄く日本海の潮ハ八丈島よりもまた薄し
此島の海岸に浪の打寄たる所ハ日光に照され白く凝て烹
たる塩のことくさまを削り取て食料とせるに塩気甚た
厚し月日乃海面を出る時も本国よりハ三四双倍大に見
ゆる也これは洋中の濛気厚き故なるへし此の島にて
月並日並を知るハ三日月と満月を以て数へ知る斗り也
月の大小閏月とも志らされハ違ひ多しといへとも大概な
して一年といふ事を定めしなり此島暖地なるか故にか

く数年存命したり若しき国ちかくも一生に堪かたしといふ
ふたもあるへしとおもひる世に云ふ無人島是実にこの
島をさしていふなやおきより外に無人島といふ島有に
や林子平か三国通覧の内に国によきある春ヶ島の南百里
に無人島有り小笠原島とといふ
享保年中小倉小笠原侯公儀に申て肯之南海を内に無
人島有り人数をさし是を論ぜらるとて小笠原兵部と
いふ人を大将として人数百五十人ほとして島の様子を
見て帰りしてあや夫より此島を小笠原島といふなり
説の虚実ふ審也も享保年中伊勢白子のその無人島に
漂流し帰国の後ち右の者その話を紗に小笠原某といふ
ふ山師　公儀に私ひは免を此地の其の々事を主と

して其外の無頼者を集め船を作り粮米を載せ乗出せ
共に風悪しくして伊豆の下田に船繋りし居る内彼の
無頼の者とも上陸して様々悪事をなしけるを以姓を
立居る事おきも所にて困り江戸へ申訴捕方の人て
下向ある右の由を彼者とも伝へ承り風便とも操出せ
乗り出し其後は行方知らずとなり扨其訴え小笠原何
某江戸に居去所かゝはり次第へに公儀を恐れ亡命以
為し其年月を経て姓名を改め三浦何某と称し江戸京
橋白魚屋敷に住居て家も其時分出奔せし事何程にあ
と久敷き事故名を忘れたり按ずるに小笠原治といふと
かん
其図を見きて島の形も大にして喬木多く属島数十ある

如くに記せしに今少く所によきは大海中の孤島にして
外に島嶼なし松本謙臣か帰帆の時順風にて昼夜六日走里
て春ヶ島に至るといふ事に就て予云ふ六る昼夜走りた
る海路の里数を以て程なる道しや海も船氣なきも海路
の遠近大概には知る道しと思ふに凡そ五六百里も有る
へしと云ふ六日の間に外に島山なと見うけて多くやゝ
云へも島小さ所に見たる事なしと答ふ此小よりて考
へ見るに始め漂流五十日斗の内に餘の島山も形事きは
古老絶にさの無人島にて漂着したるや此島の山上より
望ミ見るに外小島何里ともみへさきは此島より凡五十里
内ハ島山なき事お遠かし漂海中にも島山にも糸山を見
りけそ帰路六百の間にも餘の島を見たる事なし些以つ

それハ丈島の南に無人島何里と世の人云以ふ変も此島な
る事疑ひなかるへし林子平か図も伝聞のミにて記し敢
れも実地を踏ミたる正説とも以ひ難かるへし松本謙臣
夫なきとも彼島へ何る事十分正しくミ多るに違ひなく
きハ予ハ古の男の説ままよあま傍しく思ハ殊に海路乃
百里も順風にて一日に行く事なりといふ舟人乃庶
説にも聞つきも春ヶ島の南百里といふ無人乃庶説我
信とおもひて子平か記したる八丈島より先年伏羨巣
台命を崇りて無人島に以たりし時島の岸近く船を寄さ
るれとも岸高く浪荒くして上陸をへきやうもなし其中
に大暴風吹起て又た沖に漂海し終に土佐に着船なす
予も正しく知る所なり今松本謙臣か話によきは此島我無

人島として寄たるに逢ひはるかし接とせるに至まり無
前にいふ如く此島の谷ま岩穴弐ツあり人の住居し多る
姿と見へて鍋釜織物の腐きたるなとも残まり人か葬りた
る姿弐ツあり書付なるる板弐枚有土ニ付たる方も年を
経て朽多れも文字もきたうなく只壱枚は遠江の船なり
壱枚は元文三年正月漂着江戸堀町善八船一艘其外の文
字ハ朽て見へ不さの島に白鳥多くあり日本の白鳥より
は後ほ大なり両翼か張きは七八尺斗りに蹊（ミガキ）あり九月比
より来り翌年五月比に至きは何方へ行く放き羽も落ふは
彼の谷の内に多く集りて巣に卵を産て雛か育て五月
比に至きそともに飛ひ行く事年かわら不事なし
此島の呈羽等に木札を付けかゝる島になかからへ落る

よしを書して放ちなそもしや本国知る人のあるにも至
りなん人との意にて凡そ四十羽ほかりも放ち多りしき
又薩摩船漂ひ来てかの船より筆墨を得たる後ちの事
なりとそかゝるをしひ人達の切なる姿より出て彼の
藤氏の房書の旅事と同轍の多きしといえまし
卵の大さ茄子程なり此島無人なるかゆゑに爰に来て卵
を生なるへし青ヶ島にも稀に来ることを白（ミヽ）ふといふとな
り始めは人か恐きを捕へるにたやすかりしか後はは劇
きて人をよき迄るこそ速なり追ひ廻して漸く捕へし
なり十余年の間食をつなきしは此鳥の肉よりかなるは
なし凡七千余羽も殺し多く人肉を食とし羽を衣とし油
を燈ともとし此鳥斗かりさは十四人の命のいうて古江

へ帰る事を得る人や此肉味ひにして家鴨におとらぬ調理
を能くせは珍膳なるへし煮て日々に食したるも味ひよ
ろしきなり風なけれは飛事難く只風に搏て飛行る大鳥
なれは風を待て飛ものとみへたり海に浮ミ魚を取り喰ふ浮
の月ハ飛事難きをみるを鮫魚是を知つて足を口にくゝ
ミて海底に引込ミ終に鮫の食物となる事を見ては不仁（ムゴキ）
事とおもへとも我輩も殺をは成さぬに不仁とはおもはず
に五月より九月迄は此島なし乾肉を貯へ其間ハ魚を
釣て食物とせし頃り此島の外ハ鶯目白も年中何里隔
も年々寄て渡り来るとも稀なり燕ハ年々替ゝ渡来る鳥
は始め稀なりしか後ハ外より渡り来りしハや又た土
地にて育しなるにや甚た多く頃りたり岩穴に来りて食
物をも窃ミとり後にハ防き兼たるほとなり蝿蚊ハ夥敷居
て蝿ハ食物に付き蚊ハ岩穴に有て人をよく此二ツも防
くに便利なき斗りにて苦労（ヤヤ）なる事なりし
瘠地なる故に四季共に牧堤有りて耕引難儀那りしと
かゝ治
魚ハ大ほし魚色黒く形鯛に似て壱尺弐三寸より七八寸
まて有り本国にて見馴ぬ魚なり鮫大小有り本国ニかか
てる事なし釣り得る事なりかたし赤魚ハ本国のかさゝ
に似たり飛魚ハ多く有れとも道具なけれは捕ること有多
こは弐三尺有て軟ニ煮て食し多き事有り（飛魚と食ふ事名伊豆ニ人の作）
（ニて食料となる）事を聞たり鯨ハ此の島の沖を通る事なく頃り魚も
始はよく釣きたれとも後には余程針の外と地ニ悪きて

はる事難し一日に弐三枚能く獲れて六七枚もはなると
は里人の内に名浜辺に生ご釣きたる、事なり奥の多少
に依て施なして食料となり鮭は鳥肉貝類なとを用ふ十
四人のとの日ゝ漁猟に出るとも壱人を穴中に残して火
の番となして火を絶やさぬやうにし獲に出ても得るもの
なき時は夢に及ひ之様に帰るに心細く力も衰ふるものな
り
釣に出るにも岩山の為一日に草履弐ツヽ用ゆるなり
其の草履も草の葉をとて作りぬれは早く破き易しと
いふ
貝太源を見て磯辺に下りほふむしの貝志多ゝの貝なと
いふ小貝なりさきを食料とし東乃磯近くに木立有り此

木を見るに赤玉にて一ツさ花と云ふ木に似たり此の木
乃皮を剥きとりて水にて製し淋糸のことく小志て糸の
用になした里言さ七八尺を限りとさゝの岳に是より高
き木なし茱萸の木は里実を取て食し草きとも様にも絶
て那し大黄は里葉を採て烟草に代へ用ゆ
多葉粉はいなしへなきとの餅を校ふ拘小も何てに無
可ふ人に大黄を代へ用ひしは人生止むことを得さる
とのなるか
乾魚薦草多し獣はなし蛇の類もへてなし虫類もなし岩
穴の前に池をわり貝売を焼きて白灰となし塗り堅めて
天水を貯へ置て飲水とも旱天打続し時も水涸て難儀せし
事なくてなりし衣類は船中にて着たる儘にて上陸したまゝ

外に衣類壱ツもなし此島暖地なるか故ニ各皆木綿の襦
袢壱ツ用ひしさとなり後ちにハ彼木の皮の糸を以て自
鳥の羽を縫り合て袖なし羽織のやうに拵へ着し又里冬
に至りてハ殊ニ暖なるものなり笠ハ鳥の頭と翼の羽を
つき合せて笠となし笠なきときハ炎天ニハ歩行さる事叶
ハス後ニハ大きも切せニなりて中ニ奇麗ニ出来多り左
島の方五穀を食せさきと各みな平生呼吸(イキ)短(キレ)気して彼島
を追廻しなと走るに息切れして思ふ様に走る事难了ル
江戸に帰着して穀類を食し候ても彼息切いつとなくと
きて今ハ平日に異なる事なしと云ふ扨又漂流の内赤
小豆餅を絶へ多る夢を見る时ハ其日必ず吉兆なりと必
ず事船家り共以ひ那ら己したるさとのまし式る扨松兵
衛故にて赤小豆餅の振舞に呼れ多ル夢を見しか是ハ吉
夢ニてやなりとて人々待ち在して故郷へ帰ル事を得たりと
語りき漂流の内兼ニ左島中本国ニ帰ルやうにと祈誓を
立しハ伊勢の
太神宮と讃岐の金毘羅なり神明の加護有りしと覚へて
色々の危難を遁れ無事にて本国に帰ることを得多里等
と以ふ例し三艘の余り組の者の左島之内に七人病死し
たるを各墓所を立つらひ石碑を建て俗名を彫ら置き薩
摩の船より取上け多る大工道具鋸壱挺鉋(カンナ)弐枚鑿三挺斧
弐挺曲り尺壱本山刀庖丁各壱挺鑓(ヤリ)の打弐ツ脇差壱腰以
上の品ハ夫れ夫れ各寄合れ譲し候るも我等今かく此島
にありて殺生を以て存命在るやうなれとも今ハ七人の

めぐに成らん人は必定なりとても艱難辛苦をするならば
此筆の乃見る人は幸ひなき方よりして磯辺の寄木を
拾ひてなりとも右力を合せて小舟を打立て運を天に任
せて乗出し再び本国に帰り父母妻子再会を人は大幸な
らばやや不運にして海底の水屑と成らん人もその為に生て
楞果るも同し事なり各決断如何と以ふにみなむなり治
てうひなき家この今の何里を悔思ひ残る事さらになし
と一統に同心しけれは夫より直和船を仕立る談合を一
りなり釘なけれは舟は出来れ幸ひ休七ハ玉えふて隣家
に鍛冶有て朝夕見習したる事なきに以かにもして橐籥
を仕立是をへしとて夫より寄木を拾ひて仕立けるに可
也に出来たり石を鉄砧にし斧を鎚になして不足なる道

具釘抜壱挺釘〆壱挺鑿壱挺鉄鎚壱挺板もみ錐壱本墨壺
一ツ出来たり（さきらきハ何きの鉄にてつくりたるを後に書かふへし）是より漁
猟乃隙にも磯辺に出て木を拾ひけるに船底にも出来るへ
き板を拾寄り来きり天の行たへと取揚けましく寄木を
集めける
初の程により人家をの何こ心もなありしか舟と作
るへきと心得しより機々見る物ことに目に留りしさ
そ神佛の助成とハ申きとも実に意を用ゆると用ひ坊
家との別なる人かし
坊きと船の仕立方を知里たるものは壱人もなし先つ薦に
て形を仕立（さもとハ其の半なり）其小て造り試るなりさきを手本にして長さ
三尺斗りの舟を打立て試多り

三艘のおともにて函板をしきといひ縁通りを棚といふ
其棚斗りも四十枚を用ふ皆寄木也といふ
扨船を仕立つへき場所を見立けるにてせしツヽ拔へ始
きとも寄木を畜てにせる事なへ急に出来んとも思へき
に三年かゝりやう〳〵にして竣功しぬ長さ六間幅九尺なり
り帆柱も寄木を継て立楫もより木を集めて仕立帆ハ上
陸し気なる附各着したる木綿布子袷なとの何里しを裏表
を例の木皮の糸にて縫ひ綴りて出来たり
ハ大島に着して此帆を解き衣類になして着したり帆
ハ木綿の巾四反なり
此帆なとの縫ひ針も物ハ木にて拵へたきとも針の三挺
をはんるに殊の外労したる事なりやう〳〵に針を出来て

例の羽衣羽笠船の帆なとこなたの針にて縫ひたるなり
さて船を仕立ある場所より浜辺までの間岩石高くして
船を下ケ難し夫より各かゝりて岩石を切割り式片付
て道を平にせる事数日を経て漸く出来たり右之
手本船に島の椰子実二合納飲水の事よりして小舟を才
立出帆の次第まてを委しく書付て破岩穴の内に納し置
此後漂着の者之便りにも成るへきかとの心を用ひたる
なり右の船仕立も調ひぬれともいまた海に浮めて試み
さされは湊の月を見立て島のめくりを乗り廻して試ける
に乗り心もよし達者なる作も障なくみへ夫れ是にて気遣
ひもなしは五八日和見定め順風を待て出帆せへしと各
悦ひはへり船中にて飲水を貯へるに器物なし桶を仕立

人とされとも禍にもなる作かれき々いうんとも是なる事能
はれ久我思ひ哉免治はもうられしも作を本傑迎に寄里
来きりたまそ定ふ天の何ゝへ玉ふ神明の加護給ひなし
とたきを破りてたかとなし柳四ツを捨へ天水をたくは
へて船中の飲料となしたり帆綱其外縄の類も木字の糸
を以て製を方角を定むるに昼より西亜を向ひて走らなし
ろも極て北玉の地ふいなるへし南風を以て順風として
出をへしと彼な等に日和に出て南風なきな時ならそ来き
とて各船に乗り神仏を祈念して出帆を昼中八里程も走
里多ると覚しきに無人島もこえれ其外ななる程は島山も
なし只風にまかせて走らせ等平松を当ふるて云ふ島に
去てみちたてんを本より覚悟の事なりみゝ一葉の船に

乗里て方角もかわらぬ大海に乗り出れも是まゝ前にいふ
通り必死の決断に何らされ又争か船中に安堵して陸地
に至る事を徒らんやたの弐ツ丸何れも死地なれとも舟
行を大幸何ゝ丸生地を得る事も何れも各船に乗里て走
らせるも其の心底なりけれとも扁舟に乗して大洋中
にの盛む時に出陸のた、波濤へかゝふるへきに強くも
くも乗得て舟を出しけるものゝ形とはへも考へて云ふ
やうまハ船になきぬ人なゝ知まて乗出さなゝそのに
何られ十四人の者共皆舟乗を以て業としたるもの共え
かりなきは此危に乗きる事も出来たまといふさて何り
ぬへしけて舟も順風にて昼夜五日走らせ来なに五日目
の夕方遥に島山を見拙て何まも力を得て島を当てに走

に所望六日乃昼四ツ時頃彼島に右船を上陸して尋るに
春ケ島ニて八丈嶋の属嶋なりと云ふ年月を尋れハ寛政
九巳年六月十三日と以ふ島の役人出會ニて免て世話い
たされ小船を浜揚け以たし我等ハ此介抱を以て此島に
逗留せし無人島を出しも六月八日那里翌十四日ハ大暴風
雨ふり舟行今一日遅かりせハ我々共とも〳〵海底の水屑
となるへきを神仏の加護なりと判と以とたふと人もか
たじけなくも思ひ居りかくて七月八日日和よろしきを
帆を揚ひしに水主両人乗り揃し都合拾六人乗組て七月
八日朝五ツ時乗り出ま順風にて同日八ツ半時八丈島八
重根浜へ着岸ま春ケ島も近年山焼て人家も多く焼失し
たり焼け残りし人家九軒有り此の地五穀ハなし里芋
を烹ゝ食料とする事なり八丈島まで海上三十六里有り
といへり是より八丈島に在る事八十餘日此間ハ
官より米麦を給はり逗留中種々の介抱下され多日数
年の間髪髭なとも生ひ伸ひ放題なれとも此役所にて髪月代
致し衣の毛を剃ひ帯れを此免有りて始めてかみを結ひ
月代を剃り日本人乃姿に成なりし嬉しさ夢のやうにのミ
思ハれて感涙を流す事言ゝなり八丈島より江戸への廻船
まひ〳〵左なお事なる由毎年に弐度有り此の島の積物を
積ミ行く事なり此役船出帆の節ニ漂流人とも一緒に
汝かへさるゝなれと此便船有るまて逗留せよとなり此
島にて此役人とき〳〵十四人のものを召連各漂流せし島并
ニ帰帆の始末を尋ニ付委細申上るれとも口書ニ認め有之

扨其後便船にて八丈島出帆江戸ニ着之後根岸肥前守の
由役所に差送りき肥前守に召れ直に吟議ありて勝手
次第に帰国被　仰付候
八丈島出帆の日と江戸へ着せし日と三艘とも
何日といふ事見へ侍らず書漏したり八丈島は八十余
里の逗留をとりひ又伊豆下田に久敷風待をといひ来
のまゝも九月始めに八丈島を出帆して十月になりて江
戸へ着せしと見へ多聞他日聞て是を書加ふべし
本書の条を張り紙にて松田玄治の本書に書漏した
るを増補したるなり他日浄書の時本文中に書きか
ふべし○愚曰初て無人島に漂着せし日をたゞさば
天明七年（何月何日なるか）二十七日相当三寿を出帆し大抵五六

十月の始に無人島に着せしなるべし是も翌申年の二月の
頃なるべしとも、さまさま多くて尋ぬるべき事などの事
なりよろしく書改むべし

跋

醉山翁樋口氏齎來一書使余題其後披而閲之乃往年歸自無人島漂民松兵衛者之話也而翁之所記也語曰天地之性人爲貴人有大命命屬于食故爲重通之莫若貨故貨爲次食貨之轉漕莫若船然衆舟不得其通則有覆没漂蕩之患矣夫食貨者農夫累一年之力工人積千日之功粉粒錙銖無不膏油筋力焉然今一旦播諸無底使所貴者葬于魚腹豈不痛悲哉吾邦寰海之域也海舶之用最廣矣自古海舶之出而不帰者幾何也吁嗟負海之國送漕之吏可不以是爲念哉夫人常屬目於所見而不留念於所聞故雖適聞之亦不以爲憂謂不可若之何矣豈不無所用心之已甚矣哉吾聞西洋有航海之法若遭颶則隨風不逆縱船所適於其所止處晝景日晷夜觀

極星以知船之所止是其分海限之所起是在其方然後待風
至乎所欲適之國百無遺策今夫船師不知航海之法若遭颶
懼其故流失度程徒望陸循濱委蛇迂風故觸暗礁或被洪濤
幸不為虀粉亦剪髻祈檣拱手至乎無何有之鄉茫乎無由得
針路矣吁嗟痛而悲哉夏海之国送漕之吏留意于斯審舟楫
之製曉操船之術庶乎鮮覆没蕩漂之患矣余今讀斯記深有
感矣翁之為斯記也蓋亦有感而然乎則有同於余心者矣因
執前言以為跋

寛政戊午仲夏ノ月　福山　太　白口方識

跋

二百年来本邦海舶漂到異域者蓋不尠矣於是乎浙江福建
及呂宋安南朝鮮韃靼魯西亜蝦夷等諸夷有待我漂客寒者
衣之飢者食之居處器用愛養略備而後以便宜送還于
日本也嗚乎四海一家不亦快乎有之哉記其漂客事跡書亦
不為不多予好閲之而舟子所記俗吏所記雖可以供談奇之
場不可以備有識之觀亦天文地理風土人物足以窺其一班
也若夫漂客在異域雖險阻艱難備嘗各國保護不乏衣食則
待三四年若五六年而還今松兵衛等到遠島與此不同曾無
居人以巖穴為家又無穀種以魚為食草衣羽裳不足以掩體
雨水露滴不足以潤口如此者十年于茲矣既而計之所窮造
小舟度大洋幸而海若不驕風伯不震得皆全命而還豈不奇

予嘗聞松兵衛之話逐一記之者不為天文地理風土人物人
之慶世誰不嘗艱難険阻而如彼者未聞有之雖天不亡人知
續命亦有術矣讀此記者可戒愼而不忘之乎

寛政戊午夏五月　酔山人淳美識

此記は講会なる山本孟貞ぬしもたりし我請てうつし
つゞりけるに秘蔵おきし其人の記中に合装をまじへし
享保の年伊勢白子船の記文三年江戸若八船の記又
ゝ遠州船の記なる年月詳ならずまゝ佐渡何某の家を奉して彼の
島に渡るに風浪にあふて上陸する事を得て土佐小際
ひし記なとも世の人の見えしさまもさまざまなるも佐き
くに求め得てともにひとつとしておかむやと思へと
たよりなきそうらうみかちなる見やむなきとものかゝ
る記を見むことなくなかきへてたゝにかひなきてよ

天保て未の七月星合のゆふへ　恩――る寸

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan